

『彼岸過迄』と『ゲダンケ』

——梗概を拒む「小説」——

佐々木 亜紀子

- 一、「ゲダンケといふ独乙字」——隠蔽された邦題と原作者名
- 二、回避された邦題——上田敏訳「心」との関わり
- 三、隠蔽された原作者名——先入観の払拭
- 四、須永の語る「梗概」——「梗概」のイデオロギ―
- 五、須永による「読み」——「陰性の癩癩持」の共感
- 六、「梗概」を拒む——「ゲダンケ」への挑戦？

一、「ゲダンケといふ独乙字」——隠蔽された邦題と原作者名

本論は「彼岸過迄（須永の話）」で、須永の語る「妙な書物」（二十六）（注①）をめぐる考察である。

須永はこの書物を「偶然棚の後から発見した」と敬太郎に語る。「ゲダンケといふ独乙字」の標題をもつ「露西亞物の翻訳」は、「或文学好の友達」（二十七）から借りたままになっていたものだという。

「ゲダンケ」とはアンドレーエフの“Macur” (1902) のドイツ語訳“Der Gedanke”をカタカナ表記に直したものである。漱石の蔵書目録にある“Der Gedanke und andere Novellen” (1909) という書物のことと推定される。この書物が、「吾朝日新聞の購読者」(「彼岸過迄に就て」) にとつて既知のものであったとは考えにくい。明治四十二(一九〇九)年六月に上田敏が「心」と題してフランス語からの重訳で出版しているが、ここではドイツ語であるうえ、アンドレーエフという原作者名が示されていない。そのためこの「妙な書物」をアンドレーエフの“Macur”と知り得る読者は少なかったと思われる。

藤井省三は、上田敏の邦訳が出版されているにも関わらず、「漱石が『ゲダンケ』という独訳本の標題をカナ表記して用いたことには、原作者アンドレーエフの名を隠したことともに、ある作爲を感じざるをえない」(注②)と述べた。藤井は続けて、その「作爲」を「政治的メッセージ」としても読まれたアンドレーエフの受容史などを根拠に、「近代的我の孤独と閉塞という文脈」では、「逆効果である」と漱石は判断したのであらう」と論じた。しかし重要なことは、「ゲダンケ」が決して架空の書物ではなかったということである。邦題も原作者名も「作爲」的に隠しながら、実は原作をほめかすという両義的な方法が「妙な書物」には託されているのだ。また「妙な書物」をめぐる話題は「須永の話」、つまり須永が敬太郎に語った話であることにも留意しなければなるまい。

藤井も前掲書で指摘しているとおり、「それから」でアンドレーエフを話題にしたとき、漱石は邦題と原作者名とを明らかにしている。さらに「朝日新聞の購読者」にとつては、「それから」のみならず、「思ひ出す事など」でもアンドレーエフという名は示されていた。それにも関わらず、同じ「朝日新聞」に掲載した「彼岸過迄」で、「ゲダンケ」とだけ記した理由は三つ考えられる。ひとつは「心」という上田敏のつけた邦題と切り離すため。次には原作者名を隠蔽するため。いまひとつは原作を須永による「読み」に限定して示すためである。

二、回避された邦題——上田敏訳「心」との関わり

すでに上田敏が「心」という邦題をつけて出版していたにも関わらず、「彼岸過迄」はその邦題を示していない。それは漱石がもともと「心」という翻訳書の存在を知らなかったためだという可能性が考えられなくもない。だが元同僚という関係(注③)や、漱石のアンドレーエフへの関心などを思い合わせると、その可能性は低いといえよう。むしろ「心」という邦題を知っていて、あえてそれを避け、「思慮」という語を用いたり、「胸」に「ハート」というルビをふった(二十八)と考えられる。

上田敏訳「心」は発表当時、「誤訳」との厳しい批評にさらされた。明治四十二(一九〇九)年六月十五日に出版されるや、翌月に「無名通信」で「翻訳界の恥辱」「心」は誤訳以上の出鱈目訳 語学の欠乏、理解力の未熟」と批判された。これについて『読売新聞』は七月二十五日と二十七日に、ロシア語の原文と上田が翻訳したフランス語訳文とを対照して「心」を読み直し、上田が訳したフランス語訳は「原書とは大いに相違して居る」ので、「無通信の寄稿家の今度の評は、少々無理であつた」が、重訳をした上田も「アンドレーエフの紹介として不忠実」だと結論づけた。重ねて『読売新聞』は二十八日に、「無名通信」の記者は昇曙夢であつたらしいことも指摘し、八月一日と二日とにこれらの批判に対する上田の反論「小生の翻訳(上)(下)」を掲載した。その後「無名通信」が「日本語にした所で思想と心とは大変な相違である。(中略)思想が心と成りつこはあるまい」とした上で「単に標題^{みだし}文の事」ではなく、「作全体の精神を没却することになる」と再反論した(注④)。

当時の論争については、島田謹二(注⑤)と剣持武彦(注⑥)とが既定的確に要約しているが、特に剣持は「心」という上田敏の翻訳に焦点を当てている。剣持は「究極的に己が「心」の絶対視の招いた悲劇としてこの作品があると敏は見た」と論じ、ロシア語で“*Myser*”、フランス語で“*La Pensée*”を上田が「心」と訳した必然を述べた。

しかしながら、漱石は標題を「心」と訳すことはしなかった。訳すことを留保したともいえるか。漱石が上田敏の翻訳論を知っていたと断ずることは確かにできない。だが日記によれば同年明治四十二年の三月から四月にかけて、漱石は小宮豊隆とドイツ語でアンドレーエフを読んでおり、またその小宮は同年四月の「ホトトギス」(十二・一七)に「レオニド、アンドレーエフ論」を掲載している。それゆえ、わずか二カ月後に出版された上田敏の「心」という邦訳やそれをめぐる翻訳論争が、二人の間で話題になったと考えるのが自然であろう。「彼岸過迄」では翻訳論争のダメージから守るために邦題を記さず、別の邦訳を示すことも敢えてしなかったと考えられる。

また漱石がこの翻訳論争を知らなかったとしても、上田敏の翻訳に言及するかたちでアンドレーエフを「彼岸過迄」で扱うのは、批判的に扱っているという誤解を招くおそれがある。なぜなら漱石はかつて「吾輩は猫である 六」で「上田敏君の説によると俳味とか滑稽とか云ふものは消極的で亡国の音ださうだ」と揶揄的な文脈で敏を登場させたうえ、上田敏訳のフランス象徴詩をパロディにして迷亭にうたわせたからである(注⑦)。「彼岸過迄」ではアンドレーエフを揶揄的に扱う意図がないので、上田敏訳「心」と切り離して「ゲダンケ」とだけ示す必要があつたのだ。

三、隠蔽された原作者名——先入観の払拭

前述したとおり、アンドレーエフという名は「それから」「思ひ出す事など」で「朝日新聞」紙上示されていた。むしろ多くの「朝日新聞の購読者」にとって親しい名ではなかったであろう。だが既に二度まで示した名である以上、「彼岸過迄」に限ってその名を示さないのは、藤井が述べるように「作為」(注⑧)というよりほかない。「露西亜物の翻訳だ」(二十七)とまで示しながら、アンドレーエフという名を伏せたことにも「作為」があるう。

吉田精一はアンドレーエフが「四十三年以後愛読され、(中略)十種に上る翻訳をよび、四十四年にもこの勢いはおと

ろへなかつた」(注⑨)と述べ、当時の文学界への影響の大きさを指摘している。だが漱石の作品におけるアンドレーエフがいかなる意味をもっているかは、必ずしも十分に分析がなされているとはいえない(注⑩)。この問題は別稿に譲るべき大きな課題であるが、「それから」でのアンドレーエフ「七刑人」は、「生きたがる男」代助の恐怖心を痛切に脅かすものとして、きわめて重要な意味をもっているはずである。

『それから 四の一』では、「読み切つた許の薄い洋書」を開けたままの代助が、その「最後の幕」を想起する場面であンドレーエフの名がある。

代助はアンドレーエフの「七刑人」の最後の模様を、此所迄頭の中で繰り返して見て、竦ぞくと肩を縮すくめた。斯う云ふ時に、彼が尤も痛切に感ずるのは、万一自分がこんな場に臨んだら、どうしたら宜からうといふ心配である。考へると到底死ねさうもない。と云つて、無理にも殺されるんだから、如何にも残酷である。彼は生の慾望と死の圧迫の間に、わが身を想像して、未練に両方に往つたり来たりする苦悶を心に描き出しながら凝と坐つてゐると、脊中一面の皮が毛穴ごとにもずく／＼して殆んど堪らなくなる。

さらに『思ひ出す事など』では、池辺三山に遣つた七言律詩を「当時の余の心持を詠じたものとしては頗る恰好である」としながら、次のようにアンドレーエフに言及している。

尤も趣から云へばまことに旧い趣である。何の奇もなく、何の新もないと云つても可い。實際ゴルキーでも、アンドレーエフでも、イブセンでもシヨウでもない。其代り此趣は彼等作家の未だ嘗て知らざる興味に属してゐる。又彼等の決して与からざる境地に存してゐる。(中略)所謂「現代的氣風」に煽られて、三百六十五日の間、傍目も振らず、

しかく人世を覗いたら、人世は定めし窮屈で且つ殺風景なものだらう。

漱石はアンドレーエフの影響の大きさを認めながら、ここでは「長閑な心持」で作った「太平の趣」の対極にある新奇で「現代的気風」のものの一つとして取り上げているのである。このアンドレーエフ像では「自分は又自分の作物を新しいく」と吹聴する事も好まない（「彼岸過迄に就て」という「彼岸過迄」の意図に反してしまふ）。

「彼岸過迄」では「それから」や「思ひ出す事など」での先入観を払拭したうえで、アンドレーエフを扱う必要性があったのだ。むろん世にもてはやされるアンドレーエフ像や、「政治的メッセージ」（注⑪）というアンドレーエフでもない。「彼岸過迄」のアンドレーエフは、それを語る須永の嫉妬と復讐とをアクチュアルに実感させるテキストとしてのアンドレーエフでなければならなかったのだ。

四、須永の語る〈梗概〉——〈梗概〉のイデオロギー

〈梗概〉はイデオロギーなくしてはなし得ない（注⑫）。そこにはテクストをへ解釈するに伴うイデオロギーが必ず入り込む。引用であれ、要約であれ、ダイジェストであれ同じだ。上田敏が「La Parodie」を「心」と翻訳したことと同様の恣意性、「新体詩」をパロディとして迷亭にうたわせたのと同様の批評性が、〈梗概〉においてあらわになっている。須永は「ゲダンケ」を貸してくれた「或文学好の友達」に「まあ読んで見ろ」「梗概などは何うでも好い」「兎も角も読んで見ろ」と重ねて言われながらも、敬太郎には〈梗概〉を語った。それは「或女に意のあつた或男が」から始まり、「癡癡院に送られた」でまとめられたもので、できごとが起こった順に並べ替えた三人称の〈梗概〉である。そして「嫉妬」と「復讐」、「頭」と「胸」というキイ・ワードを抽出して「僕」と「高木」とについて語りつづける。

だが原作（注⑬）は三人称で書かれた前書きと後書きのような短い部分のあいだに、ケルジエンツェフが鑑定人に提出した「自分で起草した始末書」（注⑭）第一号から第八号までが並べられている。前書きのような部分には、ケルジエンツェフが殺人を犯したという結果と、その精神に異常な点がありそうだという疑念により、精神病院に送致されたことが記されている。後書きのような部分（注⑮）には、法廷でのケルジエンツェフの様子を描かれ、殺人の動機や事件の顛末はケルジエンツェフが「自分で起草した始末書」にしか語られていない。

「始末書」は一貫して「鑑定人諸君」に向かつての一人称の語りで、須永の言ったとおり、「彼は必竟正気なのだろうか、狂人なのだろうか」と判断を保留せざるを得ない内容が綿々と綴られている（注⑯）。たとえば自分の狂気のみならず、「狂人の看護に附けてあるあのマアシア自身が狂人である」（第四号）、あるいは「ジエムニツキイ博士よ、人が君を此処へ押籠めて、僕を呼んで来て鑑定させるなら、其時狂人になるのは君である」（第七号）と、他者の「正気」さえ疑うことばも述べられている。「驚ろくべき思慮と分別と推理との力」が溢れているが、この供述は「狂気」のなせる無意味な独白である可能性に充ちている。ケルジエンツェフ自身もまた次のように語っている。

鑑定人諸君、殺人後の精神状態といふ此鑑定に必要な時の事を、かく漠然たる言語を以て陳述したのは自分の深く遺憾とする所である。然し実の所これだけしか覚が無い、人間の言語に移し得る所はこれだけである。（中略）のみならず先に語拙く言表はした事が凡て実際あつたか、どうか確と断言は出来ぬ。或は全くそんな事は無い他の事があつたのかも知れぬ。（第六号）

ケルジエンツェフが一人称で語ることで、語られた内容は無化の可能性を俄然帯び始める。いや、たとえ「狂気」とよべるものがないとしても、一人称で語ることには「確と断言は出来ぬ」もの、つまり情報の曖昧性が必ずついてまわる。

しかし須永は「精神状態に異常な点がありさうだといふ疑念」のある男が「鑑定人諸君」に語る一人称の〈物語〉を、三人称にし、あたかも〈事実〉のように語り直している。ここに須永のイデオロギーがあらわになっている。つまり須永の〈梗概〉は、原作の構造を解体し、須永の内面が導き出した〈読み〉に限定した須永による〈梗概〉でしかない。そのことを敬太郎は気づいているだろうか。

では須永による〈梗概〉にあらわれた須永のイデオロギーとはなにか。それは一人称で語る情報を〈事実〉とするイデオロギーである。ケルジエンツェフ自身による「真相の陳述」(第一号)、換言すれば「自分」の語る〈物語〉に過ぎないものを、須永は〈梗概〉においてその不確かさを捨象した。それによつて須永は、「僕」の語る〈物語〉、つまり〈須永の物語〉の不確かさをも捨象したのだ。

たとえば須永は敬太郎に対して、「僕の前にゐるものは、母とか叔母とか従妹とか、皆親しみの深い血属ばかりである」(十六)と、故意に虚偽を述べている。これが虚偽であつたと敬太郎が気づくのは、敬太郎が松本から須永の出生の秘密を聞いたときであろう。あるいは松本が話し始めた最初の「其時限りの気分には制せられて、真しやかに前後に通じない嘘を、永久の価値ある如く話すのだ思へば間違ない」(松本の話 一)ということばかもしれない。故意に虚偽を語つたことも含めて、須永の語る母親像、須永の語る千代子像、そして事実あつたことのように語つた須永の情報は、いずれも曖昧性を内在させているのである。自分の話したことが無化することをおそれて、須永は情報の曖昧性を隠蔽しようとした。そのイデオロギーが須永による「ゲダンケ」の〈梗概〉にはしなくもあらわれているのである。

五、須永による〈読み〉——「陰性の癪癪持」の共感

須永は敬太郎に「ゲダンケ」について語るとき、その構造を解体し、「嫉妬」と「復讐」、「頭」と「胸」というキイ・

ワードを抽出した。一人称で語ることの不確かさを隠蔽しつつも、須永が「ゲダンケ」の話題を敢えてしたのはなぜか。それは鎌倉での二日間を通して発見した名づけ難い自己を説明するためのものである。

ケルジェンツェフは「理性の勝つた冷かな」（第一号）性質で、殺人を犯すその瞬間さえも理知をもって記憶していることを供述している。須永はそのケルジェンツェフに「周密なる思慮」あるいは「尋常以上の頭脳と情熱」をみている。

「常に頭の命令に屈従して来た」「陰性の癪癪持」と自己分析する須永は、「感情家として」「余りに貧弱だ」（十二）と自認していたにもかかわらず、高木をみて「嫉妬心が燃え出したのだと思」（十七）った。そういうとき出会ったケルジェンツェフの破滅的な人格に、須永は自己をみたのである。それゆえにケルジェンツェフに自己同一化してしまい、「僕のように平生は頭と胸の争ひに悩んで愚図つてゐるものにして始めて斯んな猛烈な兇行を」と思い、「高木の脳天に重い文鎮を骨の底まで打ち込んだ夢を、大きな眼を開きながら見」（二十八）たのだ。しかしケルジェンツェフの自己分析に共感した須永は、そのへ読みにおいてはいささか暴走してしまったようだ。千代子と自分と高木との「三つ巴」（二十五）の關係を、「ゲダンケ」の三人に当てはめてしまったのである。須永による「梗概」をもう少し詳しく見てみよう。

須永はケルジェンツェフの殺人の動機を、「或女に意のあつた或男が、其婦人から相手にされないのみか、却つてわが知り合の人の所へ嫁入られたのを根に、新婚の夫を殺さうと企てた」と説明した。だが原作におけるケルジェンツェフはどのように語ってはいない。確かにケルジェンツェフはタチャアナに結婚を申し込んで断られたが、その時のことを彼は次のように述懐している。

——失礼致しました。御免遊ばせ、と言ひながら、眼は矢張笑つてゐる。

そこで此方も亦微笑した。たとひ女の笑つたのは赦せても、自分が微笑したのはどうしても堪忍ならぬ。（中略）自分を此病院に収容する為に数へ挙げた原因の其一は、犯罪の動機が皆無であると言ふのだが、それ、これで動機の如何が

解りましたらう。無論嫉妬では無い。それには第一、犯人が思慮の浅い血性の人でなければならぬ。即ち理性の勝つた冷かな自分とは正反對の精神状態を予想せねばならぬ。して見ると或は復讐か知ら。さやう。まあ復讐として置く、元來人の會で知らぬ新しい感情でも、之を言表すには古い語を使ふものだ。(第一号)

またケルジエンツエフはアレクシスとタチャアナの結婚について「さぞタチャナは(アレクシスと：佐々木注)結婚してから不幸な目を見るだらう、此方の事を今更惜しく思ふだらうと考へて、非常にアレクシスに勸めて、其既にタチャナを愛してゐるのを慫慂けた」と語る。またタチャアナが夫と幸福にしているのをみて、「は、あ、此幸福も畢竟原因は自分に在ると始終思つてゐた。もと此女を放蕩の夫に添はせて、先に求婚を断つたのが、どんなに損であつたかと思知らせてやらうと謀つたが、大當違、これでは反對に愛する夫に呉れてやつた事になつた」(第一号)と述べている。要するにケルジエンツエフはタチャアナとアレクシスとを結婚させた張本人であつて、「わが知り合の人の所へ嫁入られたのを根に」もつて、殺人に及んだとは語っていないのである。

だが須永は彼の供述をそのまま受け取ることなく、自分の「三つ巴」に当てはめてその犯行を強引に解釈している。鎌倉の二日間に見出した自己は、あるいはケルジエンツエフと同じ「猛烈な兇行」に到る可能性を藏したものだとかクチュアルに実感したからこそ、彼の殺人を「わが知り合の人の所へ嫁入られたのを根に」もつたためと断じてしまったのである。すなわち須永の「読み」はケルジエンツエフに共感するあまり、暴走してしまつてゐるのだ。したがって、敬太郎は須永によつて構造を解体され、囲い込まれた「読み」での「ゲダンケ」を聞かされているに過ぎないのだ。

六、〈梗概〉を拒む——「ゲダンケ」への挑戦？

「朝日新聞の購読者」も敬太郎と同じく、邦題も原作者名も記されなかった「ゲダンケ」を、須永の恣意的な梗概そのまゝに理解してしまつたかも知れない。「ゲダンケ」のケルジエンツエフの一人語りが無化の可能性を帯びていたことも知らされず、須永の一人称による「須永の話」の情報が曖昧性からのがられないことも後景化されてしまつたかも知れない。しかし松本の「其時限りの気分」に制せられて、真しやかに前後に通じない嘘を、永久の価値ある如く話すのだ思へば間違ない」（松本の話 一）ということば、すなわち須永の語つたことを相対化することはに出会うと、何日もかけて読んできた「須永の話」での情報の信憑性にはにわかにゆらぎ始める。否、その前から「朝日新聞の購読者」は、敬太郎に見られた須永、須永の母、千代子、松本の像と、須永の語るそれらの人々の像との相違に気づかされていたかもしれない。「停留所」で敬太郎の見たもの、「雨の降る日」で千代子が敬太郎に語つたこと、そして「須永の話」で須永の話した情報はすべて曖昧性を内在させている。それらは究極的には、ケルジエンツエフの「始末書」と同じ無化の可能性を蔵しており、確たる現実的な説明を拒み続けているのである。たとえば事件を説明しようとして年立を考えたり、場所を特定しようすると、現実世界のレヴェルに解消されない時空間が浮かびあがり、読者は「彼岸過迄」の拒絶に突きあたる（注⑰）。「彼岸過迄」は「梗概」を拒んでいるのだ（注⑱）。確たる華々しい事件も、説明してかたのつく人物造型もなく、時間も空間も現実的なようでありながら「迷路」（停留所 三十一）「迷宮」（報告 七）を思わせる（注⑲）のはそのためなのだ。そして「ゲダンケ」は「梗概」を拒むもう一つの「妙な書物」として、「彼岸過迄」の中に示唆的に取り込まれているのである。「或文学好の友達」とのやり取りに注目してみよう。

僕は一体何んな事が書いてあるのかと聞いた。彼はまあ読んで見ると云つて、其本を取つて僕に渡した。（中略）僕は薄い書物を手にしながら、重ねてその梗概を彼に尋ねた。彼は梗概などは何うでも好いと答へた。さうして中に書いてある事が嫉妬なのだか、復讐なのだか、深刻な悪戯なのだか、酔興な計略なのだか（中略）殆んど分からないが、

何しろ華々しい行動と同じく華々しい思慮が伴なつてゐるから兎も角も読んで見ろと云つた。(二十七)

「文学好の友達」は「華々しい行動と同じく華々しい思慮」が書かれた「梗概などは何うでも好い」ものとして「ゲダンケ」を理解していたのである。また須永のように、構造を捨象したり、〈読み〉を囲い込んだりしてはいない。彼の「小説」観は須永のそれとは相違しているのである。元来「ゲダンケ」は、須永の「小説」観に対する彼が提出した反論材料だったのだ。

須永は自分を「小説中の人物になる資格が乏しい」とも思つていたため、「思慮の勝つたものは、万事に考へ込む丈で、一向華やかな行動を仕切る勇氣がないから、小説に書いても詰らないだらう」(二十七)とその「友達」に問い掛けたという。「小説」とは「強い刺戟に充ちた小説」だと須永は考へているのだ。たとえばそれは須永の「想像した」「小説」からも判る。鎌倉で「自分の気分が小説になり掛けた刹那に、驚ろいて東京へ引き返し」、帰途の列車のなかで、「海があり、月があり、磯があつた。若い男の影と若い女の影があつた。(中略)果は立ち上つて拳を揮ひ合つた。或は……」という「自分と書き出して自分と裂き棄てた様な此小説の続きを色々に想像した」(二十五)と、敬太郎に話している。須永のこのような「小説」観は、「三面記事や小説見たやうな事が、滅多にあつて堪るもんですか」(松本の話 十)と言う松本の妻の「小説」観の相似形ともいえよう。

だがしかし須永は「彼岸過迄」に紛れもなく描かれたのだ。須永が自分を主人公にして「想像した」「小説」とは全く違う「小説」として。それは「思慮の勝つた」男の「一向華やかな行動」はない「強い刺戟に充ち」てもない「彼岸過迄」という「小説」なのである。「小説」とは「華やかな行動」書いてこそおもしろく、「思慮の勝つた」「万事考へ込む」ものは「小説中の人物」になれないという「小説」観を否定し、須永のような男もまた「華やかな思慮」によつて「小説中の人物」になり得ると示唆しているともいえよう。

アンドレーエフは「華々しい行動と同じく華々しい思慮が伴なつてゐる」「ゲダンケ」を書いた。漱石は「華々しい行動」さえない「華々しい思慮」のみの「彼岸過迄」を書いた。当時新しい「小説」の書き手と目されたアンドレーエフの「ゲダンケ」を超える試みとして、「彼岸過迄」は書かれているのかもしれない。この目論見を知るのは、「兎も角も読んでみる」という「或文学好の友達」のことはを、自分へのことばとして受け取る忠実なる読者にのみゆるされる快樂なのである。

注

- ①、引用は『漱石全集』（岩波書店、一九九三―一九九九）による。以下同じ。また、「彼岸過迄（須永の話）」に限り、以下章段数のみ記す。
- ②、「ロシアの影——夏目漱石と魯迅」（一九八五、平凡社）。傍点は引用者による。以下同じ。
- ③、剣持武彦は「個性と影響——比較文学試論」（桜楓社、昭和六十）のなかで、上田敏と漱石との関係について、「礼は相互に尽くしていた。（中略）「心」も恐らく明治四十二年中に漱石は読んだものと私は推定している」と慎重に述べ、その影響関係を論じている。
- ④、昭和二年には熊沢復六が「思想」という邦題で出版している。現在、事典などでは「こころ」と訳したものもある。
- ⑤、島田謹二「解説」「定本 上田敏全集 第二巻」（教育出版センター、昭和六十）。
- ⑥、注③に同じ。
- ⑦、安田保雄は「上田敏と夏目漱石」（『上田敏研究——その生涯と業績——（増補新版）』有精堂、昭和四十四）で、ここで言及した「吾輩は猫である 六」の指摘以外に、二人の人間的な関わりも詳しく論じている。「漱石と柳村」（読売新聞、明治三十八・一二一―一二四）の連載をめぐる考察とともに、文壇的地位が上にあった上田に対して、漱石は「心中穏やかでなかった」、あるいは「弟子達の反目が更に二人の間を対立させ」たと論じている。
- ⑧、注②に同じ。
- ⑨、『自然主義の研究 上巻』（東京堂、昭三十）。

- ⑩、清水茂「漱石の小説技法——ロシア文学等との関係において——」（『國文学』一九六五・八）、「二葉亭・鷗外・漱石とアンドレーエフ」（『比較文学年誌』一九七二・三二）、小平武「漱石とアンドレーエフ——『それから』の不安の描法」（『えうあ』一九八二・春号）などがある。また清水孝純は森本の残した洋杖の蛇に、ケルジェンツェフの「心」を重ねて読み、「ゲダンゲ」は須永という存在の創出に極めて深い暗示を与えた」（『漱石 その反オイディプスの世界』翰林書房、一九九三・一〇）と、「彼岸過迄」におけるその影響を示唆している。
- ⑪、注②に同じ。
- ⑫、ジェラルド・ジュネット著、和泉涼一訳「バランブセスト——第二次の文学」（水声社、一九九五）の「第四十九章 凝縮」には、「どんな縮小も、決して単純な縮小ではないのだから、透明で、無意味で、そして無邪気なものではありえない（中略）。どんなふうに要約するか言ってくれば、君がどんな風に解釈しているかが分かるのだ」とある。また同書ではボルヘスの「伝奇集」を例に「ある架空のテクストの仮装された要約」についても述べている（第五十二章 ボルヘスにおける擬似要約）。「彼岸過迄」の「ゲダンゲ」は原作者名と邦題が示されていないが、「架空のテクスト」でなかったことは留意すべきである。
- ⑬、ロシア語の原作については、塚原孝氏の「教示による。またアンドレーエフの孫娘Henry and Olga Carlisleによる英訳「THE THOUGHT」（「VISIONS」1987. Leonid Andreyev//1982. HARCOURT BRACE JOVANOVICH）を参照した。
- ⑭、引用は「定本 上田敏全集第二巻」（教育出版センター、昭和六十）による。既に論じたように上田訳は誤訳との非難はあったが、今日でも翻訳は上田訳しかないので、以下上田訳を使用して論ずる。また引用のあとには、ケルジェンツェフの「始末書」の号数を記し、上田による傍点を省いた。尚、注④であれた熊沢復六訳の「思想」（『世界戯曲全集第二十五巻』昭和二年、近代社）は同じ作者の「Macabre」であるが、芸術座のために作者が脚色した六幕物の戯曲である。
- ⑮、上田敏訳の「心」には第八の「始末書」に続く法廷でのケルジェンツェフの様子を描いた部分が欠落している。英訳「THE THOUGHT」（注⑬）によれば、ケルジェンツェフはうつろな様子で裁判に臨み、ある時には奇態な質問をして聴衆を笑わせる。そのため四人の精神病理学者のケルジェンツェフに対する意見は二つに分かれてしまう。続行された裁判では、代理人を拒絶したケルジェンツェフが抗弁を求められるが、「なにもない」と繰り返して終わる（佐々木訳）。
- ⑯、供述書には一貫した話の流れはなく、「ドクトル・ケルジェンツェフは狂人の真似をしてゐると思つた。——然し実際狂人である」（第六号）「時々震へてゐて、形の崩れたものもある。実は久し振りで筆を執つたのだし、又睡眠不足で、大分衰弱してゐるから、少しは震へてゐるものあらう。然し以前もかういふ事があつた。」（第二号）「第四号書類末段の文字は強ひて読解かれずと

宜い、又一般に消の多いのをあまり重く見られるな。これを狂気の徴候とせられては困る。」(第六号)など狂気に関する供述が続く。だが「人間の行為は殆皆罪では無いか。(中略)大罪小罪の区別を設けて、殺人を大罪悪とするのは、憫笑すべき人間習慣上の虚偽としか見えぬ」(第一号)と、殺人という罪悪についての考察もある。

⑬、年立に關しては従前から議論は多いが、たとえば宵子が死んだ時期について、平岡敏夫が「この事件はいつごろ起こったものであるかはよくわからない。須永の大学在学中のことと思われるのだが、これがよくわからないということがまたこの小説のひとつの特徴ないし問題になるかとも思われる」(「漱石序説 塙書房、一九七六」と論じ、玉井敬之はそれを火葬場での千代子と須永との会話から「鎌倉での余波がまだ残っているその年の十一月の頃ではないか」(「『彼岸過迄』論——空想から現実へ——」『帝塚山学院短期大学 研究年報』三三三、一九七五・一二)と疑義を提出している。また内田道雄は「読者は一種の時間的眩惑を与えられる」(「『彼岸過迄』再考」『古典と現代』五五号、一九八七・九)と述べている。地名に關しては、須永の住んでいた場所について、中島国彦は当時の地名を推定したうえで「漱石は意図的に町名を伏せ」(「注解」『漱石全集 第七卷』岩波書店、一九九四)たとしている。また「宝亭」(停留所 三二一)については、同「注解」で中島が「淡路町一丁目一番地にあった西洋料理屋多加羅亭」としながら、西紅梅町の「宝亭」と表記する別の店もあった」ことに言及しているように、場所と店名が錯綜し特定しにくくなっており、架空性を指向していると考えられる。

⑭、佐藤泉は「『彼岸過迄』——物語の物語批判——」(『青山学院女子短期大学紀要 第五十輯』平成八・一二)のなかで、漱石の「物語に対する疑義」を整理したうえで、主に前半部をもつて「彼岸過迄」に「現実性そのものに浸透し現実性を構成している物語への批評を認めることができる」と論じており、参考になった。ただし拙稿でいう「梗概」とは「全体的な意味や動きのみを記憶しておくため」になされるような「テクスト縮約 contraction de texte」(注⑩「パランプセスト——第二次の文学」より引用。傍点は原文による。)に近く、「筋」のみを指しているのではなく、佐藤論で扱う「物語」とはむしろ異なる。

⑮、酒井英行は「漱石 その陰翳」(有精堂、一九九〇)で、「『彼岸過迄』には、一つの物が視点を換えると二様に見えてくるといった描写が多い。(中略)表裏相矛盾するようではないながら、どちらも真実であるような存在としての人間たち(須永、千代子、松本)を描くことが作者の意図であり、そのためにこそ敬太郎を造形したはずである」と論じた。本論考は酒井論に負う所が多いが、「語られた」ことに注目し、「どちらも真実であるような存在」ではなく、どちらも真実ではないかも知れぬ存在と考えた。また、「迷宮」に關しては、石原千秋が既に言及し、「そこには誰の「真実」も言葉も語られ／書かれてはいない。『彼岸過迄』は、小説の寓話でもあったのだ」(傍点は原文による。「反転する漱石」青土社、一九九七)と論じており、参考になった。

*引用においては、旧字体を新字体に改め、ルビを省いた部分がある。

*拙稿は本学大学院の小倉斉先生の講義を通して作成しました。またアンドレーエフおよびロシア語文献については、ロシア文学研究者の塚原孝氏にご教示をいただきました。両先生に厚くお礼申し上げます。

(本学非常勤講師)